

人 物 叢 書

道

どう

元

げん

竹 内 道 雄

日本歴史学会 編集
吉川弘文館 発行

著者略歴

大正11年5月生れ
昭和24年東京大学文学部国史学科卒業
現在、長岡工業高等専門学校教授

論文

永平道元と碧巖録
道元禪師の父久我通親の性格
道元の宗教の歴史的性格　その他

著書

曹洞宗教団史 永平寺・総持寺
講座 禪（分担執筆）

道　　元

昭和37年6月15日 初版発行
昭和47年9月9日 8版発行

©

著　　者　　^{たけ}竹　^{うち}内　^{みち}道　^お雄
948 新潟県十日町市四日町神宮寺内

編　集　者　日　本　歴　史　学　会
代表者 坂　本　太　郎

発　行　者　吉　川　圭　三
157 東京都世田谷区成城2丁目23の1

発　行　所　株式
 会社 吉川弘文館

113 東京都文京区本郷7丁目2番8号
電　話 (813) 9151 番(代表)
振　替 東　京　2　4　4　番

中央精版印刷・誠製本　　(落丁本、乱丁本はお取替いたします)

はしがき

越後（新潟県）の生んだ飄逸ひょういつの詩人良寛は、道元の法系をくむ禅僧であつた。ある夜のこ
と道元の著述『正法眼蔵』しやうほうげんぞうを読んで、

嗟々ああ永平何なんの縁かある、到る処 逢著ほうじやくす正法眼。（中略）一夜燈前涙留うるおまらず、湿

ひ尽す 永平の古仏録。

と詠じた。

『正法眼蔵』が道元の後世のひとびとに垂れた教えであることを知って万感胸に迫り、燈ともの前で涙がとめどなく流れ、すっかり御仏みほとけの書物をぬらしてしまった、というのである。自然の美しさと小児のあどけなさのなかに心の安住を見出した良寛の胸底に、道元が生きつづけていたことはまことに意義深いことである。

道元は親鸞と対蹠^{たいしよく}的な立場にたつ鎌倉新仏教の生んだ宗教的天才の一人である。こ

の道元の宗教が、一般の宗教界や学界に脚光を浴びるにいたったのは大正末期以来のことである。和辻哲郎博士の「沙門道元」にはじまり、秋山範二教授の『道元の研究』、田辺元博士の『正法眼蔵の哲学私観』、橋田邦彦博士の『正法眼蔵釈意』によって一躍著名となり、宗門から解放されて広く一般に迎えられるにいたった。しかしこれらの研究は専らその思想内容の哲学的研究を中心にしたものであった。史実を中心とした道元伝の研究は、江戸時代中期の大了愚門、面山瑞方^{めんざんずいほう}を中心に宗門内で孜孜^{しし}として続けられてきたが、明治四十四年栗山泰音の『嶽山史論』の提起以来、近代史学に立脚した本格的な研究が進められるようになり、辻善之助・村上專精^{せんしやう}・鷺尾順敬各博士、伊藤慶道などを経て、大久保道舟博士の『道元禅師伝の研究』の完成により一時期を劃するにいたった。

道元伝の研究はまことに至難の業である。研究の困難さの第一は、根本史料である

道元および弟子懷辨えいぶんなどの自筆本がわずかしか現存せず、またその伝記史料の基となっている『永平寺三祖行業記』ぎやうごう『建撕記』けんせいき『碧山日録』へきざんなどは、いずれも十四・五世紀、室町期から戦国時代の道元なきあと約百五十年ないし二百年以上を経ているというところである。しかも道元の主著『正法眼蔵』、あるいは『永平広録』でさえも、道元滅後から江戸時代を埋める書誌学的研究が未完のまま、道元の行実の決定に常に動揺を与えているのである。『正法眼蔵』には懷辨の七十五帖本、義雲の六十卷本、梵清の八十四卷本があり、これらが寛政から文化にかけて穩達おんたつらによって一応校合きやうごうされて現在の流布るふ本、本山版『正法眼蔵』となったものの、最近は乾坤院本けんこんいん（二四〇—二四五）の最古の写本が発見されているし、また『永平広録』には慶長三年（一五九六）門鶴もんかくが宗椿そうちんに書写させた輪王寺本と延宝元年（一六五三）正山まんざん道白によって開版されたものが一般に流通るつうしていたが、これも最近その原本である祖山本が発見されているというぐあいである。

困難さの第二は、これら『正法眼蔵』『永平広録』を中心に道元の撰述書が尨大ほうだいで、

かつその内容が天才宗教家道元の思索と体験を基調としている関係から、きわめて難解であるということである。その第三は、栗山泰音がすでに指摘しているように、道元を高祖と仰ぐ日本曹洞宗の歴史のなかだが、「醜惡なる」永平寺・総持寺両寺の闘争史であり、いわゆる三代相論さんだいそうろんよりこのかた、ことに明応ごろから明治の初年にいたるまで凡そ三百八十年の長い間、前後六回のはげしい闘争が「格式・名分・榮譽・利弊」の争奪を原因としておこっているという事実である。このような日本曹洞宗の発展史を通じて、名利権門に近づかず聖者といわれた道元を仰ぎみなければならぬと云き、その矛盾と撞著どうちやくの深淵のなかに、道元伝の研究はいよいよその困難さを覚えさせるのである。

このように道元に関しては、少くも以上三つの研究の困難さを克服しない限り、その人物伝の完成はいまだ遠い将来のことといわねばならない。

しかも道元のように宗教家であり思想家である人物伝の完成は、その人物の行実と

宗教思想をその時代的・社会的背景のなかにとらえてこれを現在に生かすところにあ
らねばならない。だが思想はあるときは行実^{ぎやうじつ}に先んじ、あるときは行実におくれ、時
代と社会に制約されながら同時にそれを超越する。また思想が論理的に曖昧^{あいまい}であり矛
盾していても、行実は容赦なくその足跡を決定する。そのうえ宗教の世界は、物質的
生活に制約されることはあっても、それをはるかに超えてそこに宗教独自の世界を構
成するのである。それゆえ宗教人を真に理解するためには、この世界にも自己を投げ
入れる勇氣が必要なのである。宗教思想家の人物を描くにあたつて最も困難な課題は、
このような行実と思想の関連を考慮しながら、史料によつてうかがわれるその人物の
行実とその背後にある高度の（特に道元の場合）宗教思想を、いかに正確に把握し理解
するかにあるのである。

私はこのような考えのもとにその困難さを熟知しながら、あえて道元の実行と思想
発展を時代的・社会的関連のもとにあとづけてみようと思つた。しかし浅学^{ひさく}菲才^{ひさい}の私

にとつてこの大胆な試みは予想以上に困難な仕事であり、蟪蛄こくこの斧に向うに等しい無謀の挙といつてよかつた。峨々ががとして聳そびえる道元の行実と思想の前に、幾度かたじろぎを覚え、よほど執筆を断念しようかと思つた。たまたま『正法眼蔵』を読んでゆくうちに、

一時より一日におよび、乃至一年より一生までのいとなみとすべし。仏法を精魂として弄ろうすべきなり。これを、生生むなくすごさざるとす。しかあるを、いまだあきらめざれば、ひとのために、とくべからずとおもふことなかれ。あきらめんことをまたんは、無量劫むりやうこつにもかなふべからず。

(自証三昧)

という言葉に出合つてようやく勇氣をとりもどすことができた。なにもかも知りつくして後に書こうなどと考へていた自己の傲慢ごうまんな愚かさを知つたからである。

有心にても修行し、無心にても修行し、半心にても修行すべし。 (礼拝得髓)

私はこれら道元の言葉に励まされ、道元に参究する決意を新たににして、再び筆をとつ

た。しかし結局、先学の研究を踏襲し、道元の名をかりて貧しい自己を描くにすぎず、私にとっては、道元の人物伝の完成はおよそ不可能に近いことに気づいたのである。

それゆえこの小著は、天才宗教家道元に挑みかつ参究せんとした私の一足跡にすぎないことを^{あらかじめ}予めお断りしなければならないのである。

本文は五部に分かれ、その内容の要点は概略つぎのようである。

第一、おいたち 家系の考察と道元の発心の動機に重点をおき、道元が時代および個人の深刻な無常観によって出家求道の生活に入ったことを述べた。

第二、求法の志 ^{にっぎ}入宋までの日本における修学時代をとりあつかい、出家の後比叡山修学を志したが、天台教団の変質と宗教改革の気運のなかに名利心を一擲して離山し、早くも渡宋の志をいだく。そして公胤・栄西・明全ら、師との邂逅によって次第に思想的発展をとげ、承久の変を転機として入宋求法の途に上った。

第三、身心脱落 在宋修行時代で、宋朝禪林を背景にして道元がどのような修行の過程を経て思想発展をとげ、そして大悟徹底にいたったかを私なりにあとづけようと試みた。これは私の最大の関心事であつたから、全篇中もつとも力を注ぎ、紙数の多くをここに費した。

第四、弘法救生 帰朝以後、興聖寺を中心にして学人の育成と在俗の教化という理想主義にもとづいて法演を展開した時代で、とくに社会的な背景のもとに道元の行動をとらえることにつとめ北越入山については多く私見を加えた。

第五、一箇半箇の接得 北越入山のち入滅までの時期で、道元が教化の態度を変更して専ら門人の接得育成に努めた時代である。吉峰寺・禅師峰・大仏寺・永平寺時代の行実と思想をたどり、鎌倉行化より後の永平寺生活の特色を述べるにつとめた。以上のうち特に道元の禪的用語については宗門その他専門家の御教示を仰ぐべきであつたが、充分に意を果せなかつた。また学界の成果もその都度とりあげて紹介しつ

つ述べるはずであったが、本書の性格から問題の箇所の外は多く割愛せざるをえなかった。多くの誤りや独断もあらうと思われるので、大方の御叱正しっせいと御教示を仰げれば幸いである。

本書は私の乏しい学的業績にも拘わらず、森克己・増永靈鳳両博士の御推薦を受け、幸いにも執筆を許されたもので、両博士ならびに日本歴史学会・吉川弘文館の御好意に厚く感謝を捧げる次第である。この間とくに竹内理三・玉村竹二・辻彦三郎・今枝愛真・土田直鎮の諸氏をはじめ東京大学史料編纂所の方々、大本山永平寺の佐藤泰舜・大塚道光・天藤全孝の諸師をはじめ宗門の方々、京都妙光寺今津洪嶽・宗仙寺細川容伯・欣浄寺古山実定こんじやうじの諸師、および佐久間洋行氏、東京国立博物館石田尙豊氏には一方ならぬ御世話にあずかった。また大本山総持寺副貫首岩本勝俊師、および駒込吉祥寺執事石川大玄師からは学生時代このかた変らぬ温情のもとに御指導と御援助をいただいてきた。本書が初めて世に出るにいたったのは、ひとえにこれらの方々ならば

に本書に多く引用を許していただいた学界の先達・諸賢の賜ものである。記して深謝の意を表したい。

最後にこれは全く私事にわたるが、郷里越後の雪深い十日町の地で、観世音の御堂を護りながら、私の遊学の我儘を許して研究を続けさせてくれた老父母に感謝したい。私が今回あえて筆をとったのはその報恩の一端を果たしたかったためである。

昭和三十六年十二月二十三日

駒込吉祥寺旃檀林寮舎にて

竹内道雄

恩愛をあはれむといふは

恩愛をなげすつるなり

——『正法眼藏』行持——

目次

はしがき

第一 おいたち……………一

一 家系と誕生……………一

二 無常の世……………二

三 出家……………二

第二 求法の志……………三

一 天台教団の変質……………三

二 比叡山修学……………四

三 栄西との相見……………五

四 承久の変と入宋求法……………六

第三 身心脱落…………… 九

一 大陸の仏教…………… 九

二 阿育王山の典座…………… 一〇

三 天童山の修行…………… 一〇

四 嗣書閲覽…………… 一七

五 諸山巡錫…………… 一八

六 身心脱落…………… 一〇

七 外国の器量人…………… 一〇

第四 弘法救生…………… 一六

一 普勧坐禪…………… 一六

二 深草閑居…………… 一六

三 興聖寺開創…………… 二一

四 北越入山…………… 二五

第五 一箇半箇の接得……………二七

一 吉峰寺掛錫……………二七

二 永平寺精舎……………二七

三 寛元・宝治の世情……………二八

四 鎌倉行化……………二八

五 一箇半箇の接得……………二九

六 入 滅……………二九

略年譜……………三八

系 図……………三四

主要参考文献……………三五

口
絵

道元の肖像（福井県、宝慶寺蔵）		卷頭
道元の自筆『普勸坐禪儀』		卷頭
道元の肖像（福井県、永平寺蔵）		卷頭
道元の自筆『正法眼蔵』山水経		卷頭

挿
図

松殿山荘		六
久我の里（久我神社を望む）		六
誕生山妙覚寺		元
承陽大師（道元）得度靈蹟		三〇
京都付近略図		四
建仁寺山門		五
道元自筆「明全戒牒奥書」		六
伝明全和尚筆「師資付法偈」		七
禅宗法系略図（一）		四